

代ゼミ模試に見る2010年受験動向 難関校人気、資格人気のゆくえ

代々木ゼミナール入試情報センター
本部長 坂口幸世

センター試験の出願締め切る

2010年の大学入試センター試験の出願は10月14日に締め切られました。出願者数の確定数は例年11月下旬に発表されますが、締切日現在の数では昨年より約2千人の増加となっています。受験人口減少期と言われますが実は2009年から2015年くらいまでの間は受験人口は横バイの状態が続きます。センター試験についても54万人程度の志願者数がしばらくは続くと思われます。全体の競争倍率も横バイで推移しそうです。

しかし現在の入試では、こうした全体の受験人口や倍率よりも、社会状況の変化や、それに少なからず影響を蒙るであろう受験生の受験校選びの傾向、また各大学の募集戦略に対する受験生の反応ということが入試状況を大きく変える要素となっています。

今回は代々木ゼミナールの公開模試(第2回センター模試)のデータをもとに、現時点での志望動向を見てみたいと思います。

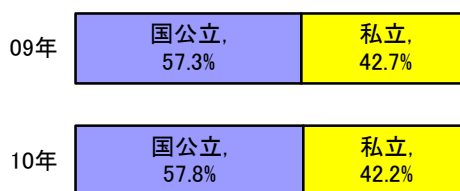
図表1 センター試験の出願者数(締切日時点)

区分	志願者数	内訳	
		卒見者	既卒者等
2009年(締切日)	524,478	426,931	97,547
2010年(締切日)	526,406	429,651	96,755
対前年増減	+1,928	+2,720	-792
対前年指数	100.4	100.6	99.2
2009年最終数	543,981	431,263	112,718

不況の落とす影? 国公立志向は強まる

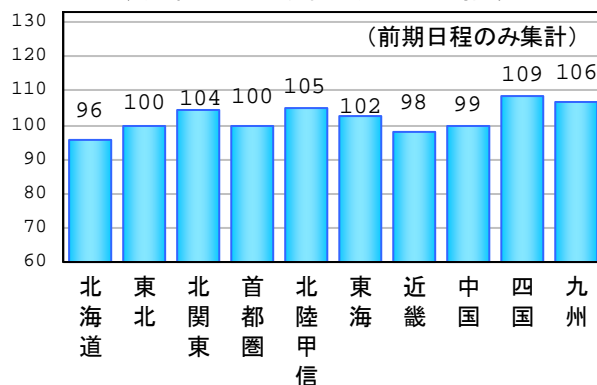
まずは国公立と私立の志望割合です。代ゼミ模試での第1志望校の割合を昨年と比較したのが図表2です。09年とあるのは2009年を受験した人たちが昨年模試を受験したときの志望校です。今回は昨年よりも若干ですが国公立志望の割合が高まっています。

図表2 第1志望校の国私割合



この変化は不況の影響がなにがしかは考えられるでしょう。ただしそれは「お金がない→授業料の安い大学」という直接的な影響ももちろんあるでしょうが、すでに前の号で述べましたように、不況という要因が、大学新卒者採用市場の冷え込み(就職率の低下)という現象を迂回して大学選択に影響を与えていると思われます。1990年

図表3 国公立大所在地別の志望指数



代後半に盛んに言われた「買い手市場」、「就職氷河期」などというタームがちらほらと聞こえてきています。例えばある調査によると来春卒業予定の大学生の就職内定率は対前年で3割近く悪化していて、次の年も厳しいと予想される、などです。

大卒就職率の低さ(またはその予想)が大学の選択に影響を与えるのは国公立/私立の選択だけではないでしょう。地元の大学か、大都市の大学かという選択にも影響すると考えられます。

そこで国公立大学の所在地別に志望者数を昨年と比較して指数で表したのが図表3です。首都圏や近畿圏にある国公立大学の志望者は減少していて、西日本や中部地区の大学への志望者が増えています。

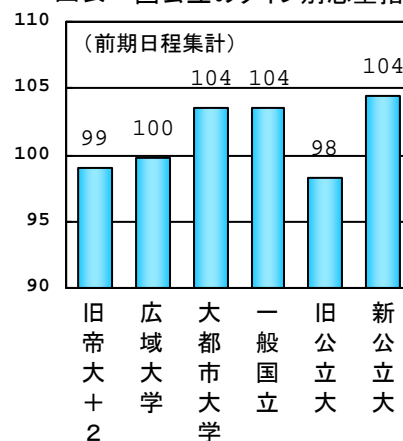
旧帝大等の個別の志望状況は図表4です。全体的には「西高東低」の傾向です。東大など東京の難関校の志望者が減少しているのは地方からの志望者が減少していると推測されます。西日本の難関大学の志望者が増えているのは、これらの大学への全国的な人気の高まりを示すというよりは、西日本の受験生が西日本の範囲内で志望校を選ぶ傾向が強まっているからでしょう。また大学のタイプ別の志望状況(図表5)は、全体として難関大学を避け、易しい大学を志望する「安全志向」が強まっていることをうかがわせます。

と言ってもこれは現時点での志望状況の傾向です。国公立大学はセンター試験後に出願をするため、センター試験の成績に強く影響を受けます。2009年の場合はセンター試験の問題が難化したため難関大学が敬遠されて志願者は減少しました。2010年のセンター試験問題が難化するか易化するかはわかりませんが、易化すれば前年とは逆の現象が起こることもあります。

図表4 旧帝大等の対前年の志望指数 (前期日程集計)

大学	指数
北海道大	94.6
東北大	94.1
東京大	94.7
東京工業大	93.5
一橋大	97.0
名古屋大	102.7
京都大	108.3
大阪大	101.9
九州大	104.4

図表5 国公立のタイプ別志望指数 (前期日程集計)

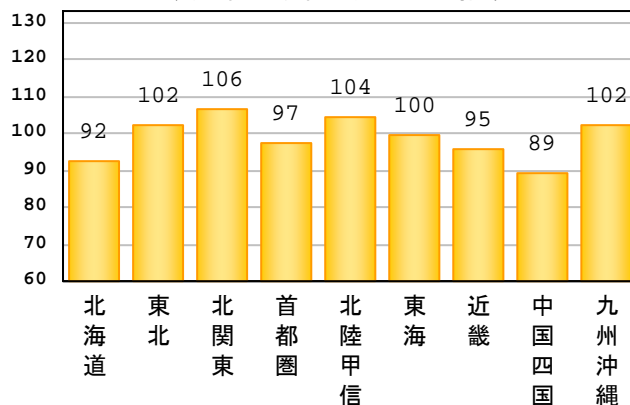


旧帝大+2=旧7帝大と東工、一橋。
 広域大学=筑波、金沢、神戸、広島など。
 大都市大学=首都圏・京阪神の国立大。
 一般国立=その他の国立大学。
 旧公立大=1970年以前に設置の公立大。
 新公立大=1970年以降設置の公立大。

大都市私大への志向は弱まる？

私立大学の志望者割合は減っていますが、加えて所在地別の大学人気に変化が見られます。基本的には国公立大学と同様の大都市志向の後退とも言える傾向です。図表6に見るように首都圏と近畿圏の私大の志望者(のべ数)は減少しています。だからと言って地方私

図表6 私大所在地別の志望指数



大の人気の上昇しているとは単純に言えません。受験生の選択は、地元大学／大都市大学という軸と、国公立／私立という軸の2つをめぐって行われるからで、地元国公立大志望の増が、大都市圏大学志望の減とともに地元私大の減にもつながっているようです。

では大都市圏大学は一様に志望者を減らしているかというと、それはその中でも志望の仕方に込み入った傾向が見られます。

図表7に首都圏と関西圏の主な大学の志望指数を示しました。首都圏の早・慶・上智や「MARCH」と呼ばれる大学、関西圏でも「関関同立」と「産近甲龍」でほとんどの大学が志望者減少となっています。しかし次のグループの「日東駒専」では増加傾向にあり、表には省略しましたが、この他に国学院大、武蔵大、亜細亜大、東京経済大、国土館大、東京電機大など増加大学が多くなっています。また関西圏では、(これも表では割愛されていますが)大阪経済大、大阪産業大、大阪工業大、関西外国語大、摂南大、桃山学院大などが増加となっています。要するに大都市圏の私大志望者減少は、志望者がもともと多い大規模難関大が減っているために全体数も減少になっているという側面が強いのです。

これはつい2年前まで起こっていた現象のちょうど裏返しのような動きです。つまり2年前までは、少数の大規模大学が志願者を増やし続け、多数の中小規模大学が志願者を減らす、しかしトータルの志願者数は増加が続く、ということが起こっていました。

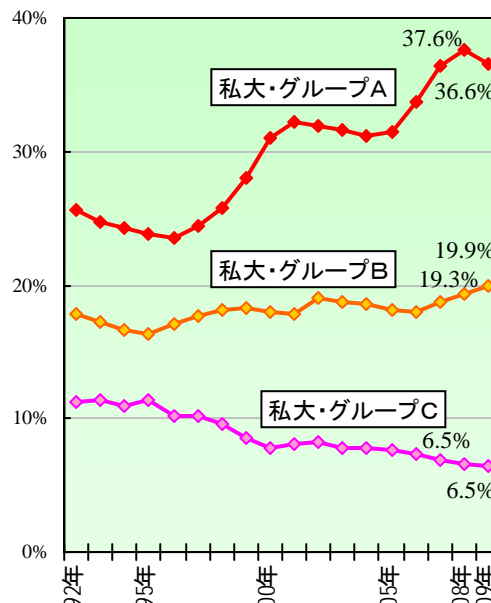
ところが2009年入試では大規模大学の志願者増加傾向は一部を除いて頭打ちとなり、「中堅」と言われる大学での志願者増加が起こってきました。図表8は私大の志願者数の、大学グループごとのシェアの推移です。グループAは「早・慶・上智・MARCH」と「関関同立」を中心とした15大学、グループBは「日東駒専」と「産近甲龍」を中心とした15大学、グループCはその次のレベルの15大学です。この推移と2010年の受験動向をつなげて考えれば、難関大学から中堅へという流れは2009年に始まり2010年へと継続していくと見る事ができるでしょう。

特に今回の志望動向で特徴的なのは、例えば来春新規に「全学部日程」を導入する青山学院大では、その入試改革の規模に見合った志望者増加と

図表7 難関私大の対前年の志望指数

大学	指数	大学	指数
早稲田大	89.8	東京理科大	94.9
慶應義塾大	88.2	芝浦工業大	101.3
上智大	90.5	東京都市大	102.7
立教大	96.1		
明治大	102.9	同志社大	84.7
中央大	88.7	立命館大	89.6
法政大	93.6	関西大	92.8
青山学院大	100.7	関西学院大	91.2
日本大	103.0	京都産業大	99.5
専修大	106.9	近畿大	108.2
東洋大	106.8	甲南大	88.2
駒澤大	95.2	龍谷大	84.3

図表8 特定大学の志願者数シェア



はなっていないということです。同様に上智大では文学部や総合人間科学部のいくつかの学科で2次試験を廃止しますが、志望者増にはつながっていません。(ただし上智大で従来2次試験で行っていた「学科試問」はなくなるわけではなく、通常の試験日に実施されます)。また関西の大学では先月号で紹介しましたように、立命館大、関西大、関西学院大、近畿大、京都産業大で学部の新設がありますが、志望者が増加しているのはこのうち近畿大だけです。

もっとも公開模試での志望校の申告には校数制限がありますし、また新設学部については周知に時間がかかることもあります。しかしわずか2年前までは、大規模大学での入試日程の複数化や学部新設に対する受験生の注目度はきわめて高いものがありました。その頃とはかなり状況が違ってきていると言えます。

大都市私大への志向が後退していることの影響を最も強く受けるのは難関大学です。全国の広範囲から志願者を集めているのが難関大学であり、広範囲から集まるから難関なのです。また、ここ数年の難関大学が入試と大学の改革で受験生を集めてきたものの、ここにきてその限界が見えてきたのかもしれません。

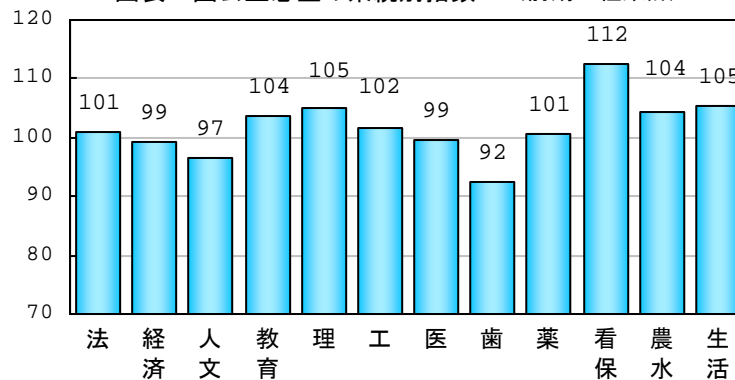
系統別人気も不況型

次に学部系統別の志望動向を見てみましょう。図表9と10は国公立と私大の系統別の志望状況(対前年の指数)です。

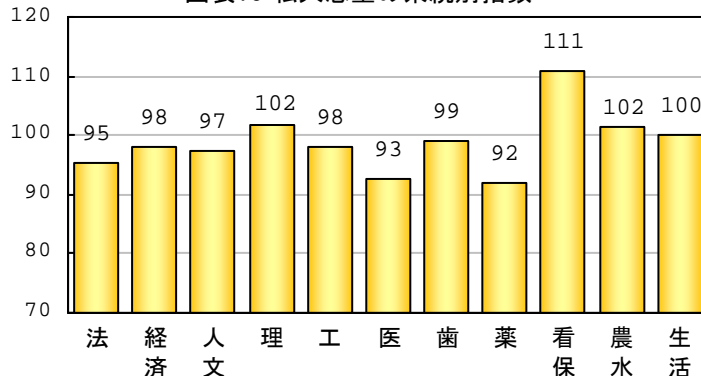
文系学部の志望者は若干の減少となっています。昨年の同時期には経済系の人気上昇していましたが今回は減少となりました。代わりに、昨年人気のなかった法学部の志望者が回復してきました。特に国公立大では増加に転じています。しかし図表11の詳細系統の集計によると、志望者が増えているのは法学科・法律学科ではなく、政治行政や政策の学科なのです。法科大学院修了者の新司法試験合格率が低いという状況は続いており、法曹界をめざす人の減少は続いているようです。「不況の時の公務員」と言われるように、就職状況が厳しくなると公務員志向が高まります。国公立の政策・行政の学科の人気はその表れのようなのです。

「不況の時の」と言えば、定石通

図表9 国公立志望の系統別指数 (前期日程集計)



図表10 私大志望の系統別指数



り教育の人気の高まっています。国公立の教育系の志望指数は104です。しかも図表11の詳細系統で見ると、教育学部の中でも教員養成課程の人気の高まっているのであって、「ゼロ免」(教育学部の中にあるが教員免許取得を卒業要件としない課程)は志望者が減っています。私大では教育学部が少ないので図表10では集計していませんが、教育学部や人文系学部にある教育の学科、家政学部に児童や「こども」の学科を集計したものが図表12の「こども」と「教育」で、こちらも人気上昇していることがわかります。

文系的資格学科といえる「福祉」についてはどうでしょう。こちらはここ数年人気低下が著しく、2009年入試ではやや持ち直した感がありましたが、

2010年については現段階で国公立・私立ともに志望者は大幅な減少となっています。

人文系の志望者は減少しています。詳細系統については国公立大学は学科別募集が少ないので集計してありません。私立大学で見ると、2009年の実際の出願状況の傾向が続いています。つまり、英米関係の学科の人気の低下して、中国やアジア関係の人気の上昇しています。ただしこの動きは実は、昨年の秋から出てきたものです。図表12はこうした動向が発生する前の昨年の夏と今年の夏を比べたものですから、2010年の実際の出願はこの数値とは若干異なってくるでしょう。

理系学部では増加となりそうな学部が多いです。理・工・農の人気の高さは昨年に引き続いて(若干ですが)上昇しています。ただし私立の工学系は若干減少しています。詳細系統では、理学部の物理、工学部の機械工、建築といった「物理系」学科が国公立・私立ともに志望者が減少しています。農学部の中では獣医の志望者減は続いています。獣医の出願者は2000年頃をピークに減少が続いています。ただし、実質倍率は2009年で国公立前期は5倍、私立は8倍ですから、まだまだ難関学科であることには変わりありません。

図表11 国公立大の詳細系統別志望指数

分野	指数	分野	指数	分野	指数
法律	98.6	化学	107.9	薬一括募集	92.1
政策・行政	111.8	生物	103.2	薬6年制	107.3
経済	100.4	地球	81.2	薬4年制	100.6
経営	93.1	機械工学	94.1	看護	112.5
国際外国語	92.9	電気電子工学	109.0	理学療法	97.5
福祉	92.1	情報工学	107.0	作業療法	99.5
教員養成	105.1	応用化学	110.9	放射線	129.5
教育ゼロ免	97.0	建築	92.7	検査	115.0
スポーツ	103.2	建設工学	98.8	歯科衛生	91.7
数学	114.1	応用生命	96.6	栄養	110.9
情報科学	110.5	獣医	91.9		
物理	96.6	農その他	106.0		

図表12 私大の詳細系統別志望指数

分野	指数	分野	指数	分野	指数
法律	95.1	観光	118.8	応用生命	106.8
政治	96.6	心理	96.2	システム・経営工学	76.3
経済	95.6	こども	109.5	獣医	93.1
経営	103.2	教育	105.4	動物	108.5
流通	94.8	スポーツ	107.4	看護	115.4
社会	94.9	数学	107.9	理学療法	101.0
社会情報	88.9	情報科学	97.1	作業療法	101.3
福祉	92.2	物理	97.7	他のリハビリ	97.6
歴史	97.7	化学	102.6	放射線	117.5
言語文化-日本	100.7	生命科学	104.4	臨床検査	116.9
言語文化-英米	92.9	機械工学	92.8	臨床工学	120.5
言語文化-ヨーロッパ	92.1	電気電子工学	108.5	栄養	100.2
言語文化-中国	107.4	情報工学	104.3	被服	88.1
言語文化-アジア	101.8	応用化学	104.4	生活環境	98.9
国際	96.5	建築	93.6	生活文化	102.5
		建設工学	103.5		

この獣医も含めて6年制の学部学科(医、歯、薬)の志望者は減少しています。国公立の薬学部は若干増となっています。国公立は前期日程の志望者数だけを集計してありますが、公立の3つの薬学部(岐阜薬科大、静岡県立大、名古屋市立大)は前期日程の募集はなく、中期日程だけで募集をします。そこでこの3学部の中期日程を加えて再計算すると志望指数は99という微妙な数になります。いずれにしても国公立の薬学部の志望者減少は「底」を打つことになりそうですが、私大の志望者減少はまだ続きそうです。

この他の医療系の学科はほとんどが志望者が増えていきます。00年代前半の医療資格人気の再来が予想されます。これも「不況時代対応」の学科選択傾向なのかもしれません。

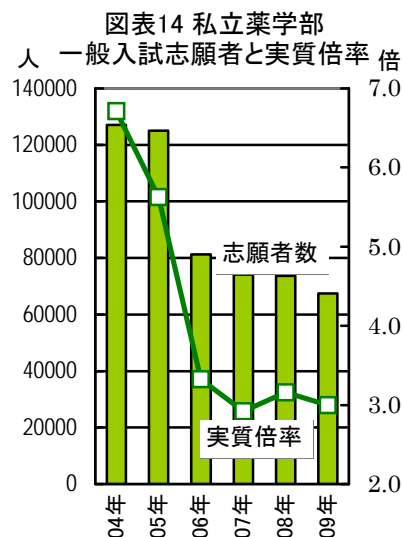
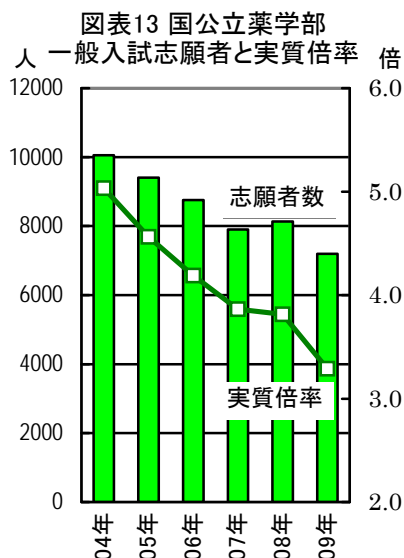
しかし、前月号で紹介しましたように、例えば看護学科について言えば、最近では出願者は増え続けるのに倍率は低下するという状況になっています。それは看護学科の新設が相次いでいるからです。同様のことは理学療法、作業療法などの学科についても当てはまります。私大では2010年も多くの医療系学科の新設が予定されていますから、志望者が増えていてもそれが必ずしも難化につながるわけではありません。

栄養も資格の学科としての人気と見られます。生活科学系学科の中では最も倍率が高く難関の学科です。2010年は盛岡大、文教大、神奈川工科大で栄養の学科の新設があります。また公立の高知女子大では改組により入学定員が倍増(20人→40人)します。

模試動向には現れていない2010年の特殊要因

受験生の動向は社会や経済の状況に影響を受けます。もちろん株式市場のように個々の事象にヴィヴィッドに反応するわけではないでしょうが、社会・経済情勢の「空気」といったようなものに左右されることはあるでしょう。

昨年来の不況に、回復のきざしが出てくるのか、政策転換で地方の疲弊が進むのか、といったことの他に、最も大きな社会要因は、前にも述べました大卒の就職状況です。すでに民間調査のデータが出ていますが、文科省・厚労省の調査結果もこれから発表されます。それによって受験動向に変化が出てくることもあるでしょう。



お知らせ
9月号で、私大の新設について「新設予定は図表8の5校」としましたが、そのうち大阪物療大学については、設置認可申請が取り下げられ、2010年4月の開学は見送られことになりました。

もうひとつの今年の特殊事情は「新型インフルエンザ」です。これが全体の受験動向にどうかかわってくるかは予測しにくいのですが、動向とは別に、個々の受験生の受験の仕方に関することもありますので、現在判明している「新型インフルの入試への影響」をあげておきます。

まずセンター試験については追試験の実施日が1週間遅れることが決定しています。そのため、大学入試センターから各大学へのセンター成績の提供開始日が当初予定の2月2日から2月5日に変更になりました。

この変更が各大学の入試日程をも変更させることとなります。センター成績データを使って判定する作業はどの大学も2月5日以降となるわけですから、合格発表日を遅らさなければならぬ大学が出てきました。具体的には、私大のセンター利用入試の合格発表日と、国公立大学でセンター試験を課す推薦・AOの合格発表日です。当初2月5日以前を予定していたところはもちろん、2月6日発表予定の大学でも繰り下げる大学もあります。各大学のHPや、受験票と一緒に送付されてくる告知文書に注意してください。

各大学の試験については各大学が決定します。方針が決定した大学もありますが、大規模大学の検討は遅れています。

国公立大学では追試の実施を検討しているところがありますが、詳細は不明です。国公立大学の一般入試は、合格発表期日と入学手続き期限が全体として決められています。この日程のミソは、全大学の前期日程の入学手続きを締め切った後に後期の合格発表を行うという順序です。これが崩れるとルールが変わってしまいます。この日程の仕組みを覆さずに追試を行うとするとかなりタイトなスケジュールになるでしょう。

私立大学の一般入試では、新たな試験日を設定しての追試の実施ということもありますが、試験日程が複数ある場合(前期、中期、後期など)は、次の日程に振り替えるという措置をとる大学も多いです。しかしこのような何期にもわたる試験日を設定していない大学は振り替えはできませんのでどうするか、難題です。だからこうした大学——それは最も注目される難関私大や医科大学です——の検討が遅れているわけです。いずれにしても受験票が送られてくるまでには結論は出ているはずですから、各大学の最新情報に注意してください。

また追試や振り替えなどの特別措置の対象となる場合は事前に大学に連絡や申し出をすることが必須条件となります。また対象者が新型インフルエンザ罹患者に限定されるのか、他の疾病も対象になるかは大学によって異なります。「加療期間明記の診断書」が必要な大学もあれば、処方箋のコピーでもよい、ということもいろいろですから、注意が必要です。

最も望ましいのは受験期間中を健康で過ごせることがもちろんです。手洗い・うがいの励行、マスクの着用、十分な睡眠など、日常の生活でできる予防対策をしっかりとってください。